

まちづくりの原点

— 商人目線から —

河 井 達 志

はじめに

商店街の一員として宇宿（うすき）の街でまちづくりを始めて30年が過ぎた。30年前が昨日のことに感じ、季節の巡りは短く早いと思うことである。その30年間に多くの人を知り、沢山の人にお世話になり、「お蔭様」の人生と言えるほど多くのご支援やご協力、ご助言を頂いた。宇宿商店街が平成20年度中小企業庁「新頑張る商店街77選」に選ばれ、活動の紹介や視察が数多くようになったのも皆様のお蔭と心から感謝している。その私が商店街の一店主の目線で、「まちづくりの原点」という題で、まちづくりに対する思いを綴る。自らが経験した事や学んだ事の内容をご一読いただければ幸甚である。

1 宇宿商店街の歴史と成り立ち

1276年島津藩第三代藩主、忠継の庶子であった山田直久（なおひさ）が宇宿の地頭に就いた頃から島津藩の支配下に入り、藩政時代大きな道路であった伊作往還（伊作街道）と山川路（谷山街道）の結節点として宇宿の所在が記録されている。その幹線を行き来する通行者のため休憩所を兼ねた茶屋があったのが宇宿商店街のルーツと考えている。当時は往来も多く、隣には「二軒茶屋」の地名も残っている。歴史家によるとご城下へ入る前に身づくりいや休憩するために使ったと言われている。歴史的に宇宿の茶屋が注目されたのは島津18代藩主家久が谷山慈眼寺に祀られた亡母を弔うために馬を繰り出し、帰りに脇田川で馬に水を飲ませるあいだ、休憩した場所としたことに始まる。

茶屋は茶の接待や物産の販売、ジャンボ餅の飲食や登城するために衣

服の着替えなどに利用されていた。これが宇宿の商店の始まりと言える。ちなみに宇宿地区（日の出陸橋の下から谷山方面へゆき脇田川にかかる宇宿橋まで）の旧道は茶屋馬場（ちゃやんばば）通りと呼ばれ、乗馬の訓練や馬の取引がなされていたとされている。

宇宿商店街が本格的に姿を現し始めたのは昭和48年、鹿児島大学医学部が城山の麓にあった鶴丸城跡地（旧制 第七高等学校跡地）から宇宿の後背地である桜ヶ丘に移転が決まるところからである。国道225号線もあらたに旧道から新道へ整備され、国道から桜ヶ丘へ向かう宇宿本通りもその整備に伴い舗装された。店舗は従来の旧道沿いの店舗も含め市電から国道に向かう東側に数多く張り付いたが、西側には鹿児島銀行宇宿支店を始め幾つかの店舗が並んでいる程度であった。

50年代になると医学部の施設も増え、それに伴い宇宿商店街は見る間に様子を変えていった。宇宿地区の小さな生活道路も舗装され、田圃や畑が住宅に変わった。折あたかも戦後のベビーブーマー（今の団塊世代）が高校生から成人になり、生産年齢層も増え、商店街も活気を呈してきた。都市のドーナツ化現象の恩恵と言えよう。宇宿商店街の店舗数も200店舗が並ぶ商店街になっていた。



（宇宿の現風景）

2 日本における商店街の誕生

日本の歴史の中で商店街の起源は「楽市楽座」と言われている。

これは織田信長が安土城を築いたときに城下に活気をもたらすため商いを自由闊達に行えるよう作った制度で、異国文化に興味があった信長は商店街には物品販売のほかにも大道芸人もいて、賑やかであったと幾人かの歴史家が書いている。また、国内から人が集まり、情報交換の場で

あり、今で言う地域コミュニティの場があったと想像できる。

爾来、各地で寺や神社で「市」（いち）が開かれ（十日市、二十日市など一定の日や祭り開催日に実施）、賑わいを増すにつれ常設店舗が開かれ、宿場町や城下町として人が集まり、現在の商店街の元祖となっている。特に規模が大きい集積地は現在の中心市街地の発生地ともいえる。鹿児島でも現存する市としては南九州市川辺町で2月に開催される「二日市」が歴史もあり沢山の人が出があることで有名である。

3 宇宿商店街振興組合の形成

昭和50年鴨池動物園跡地にダイエー鹿児島店がオープンした。以後全国チェーン店や県外資本のスーパーの出店が本格的に始まった。昭和56年脇田の隣地、笹貫に寿屋がオープン、その影響で宇宿商店街の売上も寿屋オープンから3か月目まで2割減少した。我々にとってはダイエー出店の影響がほとんどなかったのも、寿屋の出店でいよいよ大競争時代に突入かと色めきたった覚えがある。しかし、当時は人口が増え続けており、しばらくすると個店経営も落ち着きを見せるようになり、宇宿商店街の200店を超す店舗も、宇宿周辺の人口も多さに支えられ売上も一定額を確保しながら経営を続けていた。

ちなみに、平成7年より日本はオーバーストア（人口一人あたり売り場面積1平米を超えること）時代に突入している。

当時はまだ量販店との競争に関する商店街の意識はあまり高くなく、共存できるかもしれないと思っている感があったが、我々はその後の量販店出店攻勢は続くものと考え、お客様との接点を設けようと「宇宿納涼夏祭り」をスタートさせて、商店街の存在を地域にアピールすることにした。その後、国の方針が大きく変わり量販店の出店に際してその売り場面積を調整していた「商業活動調整協議会（商調協）」が廃止されると同時に、量販店の出店は攻勢に転じ、ダイエーの全国展開が加速している。宇宿も危機感を感じ、宇宿商店街に三つあった任意通り会をまとめ、法人商店街結成へ目指し組織化を図ることにした。

私を始めとする3名が、各店舗の店主や地主の方を毎晩訪問し、賛同を取り付け、ついに平成4年12月3日鹿児島県で22年ぶりの法人商店街として宇宿商店街振興組合が誕生した。

振興組合を設立するには土地の所有者や建物に入っているテナントを含め全数の三分の二が賛同、出資することが条件とされ、その地番は確定後、法務局に登録することになっている。手順はまず初めに想定地域と設立目標年月を設定し、地域内の所有者や店舗の同意を取り付ける。期限が来た時点で賛成者が三分の二を超えた地域に登録することになったが、その領域は最初の設定地域の半分になった。最終の登録会員数は67店、組合設立と同時に街路灯の設置事業に着手、合計58基を設置した。その街路灯が通りを照らし、暗かった通りも夜でも顔が見えるほど明るくなり商店街による安心安全な街づくりがスタートした。当初は水銀灯であったがエコ・省エネの観点から現在はすべてLEDに取り替えている。

宇宿商店街振興組合の設立目的は

- ① 販売促進事業の推進、組合員の相互補助に関する取組み
- ② 商業環境の整備ならびに地域活性化事業の推進
- ③ 福祉向上に関する事業

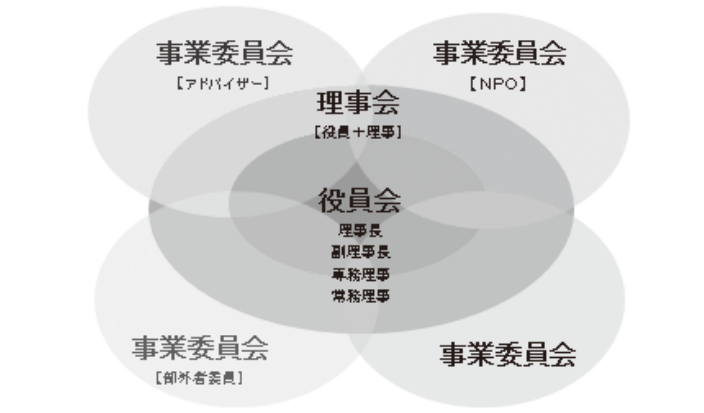
の3つとなっている。

組合活動を支える法律である商店街振興組合法は昭和37年に施行され、事業および運営はその法律によって規定されている。また全国各県に県振興組合連合会有り、全国商店街振興組合連合会として経済4団体の一つとして認知され、国への陳情活動、地域商店街の事業に関する支援事業を実施している。その力を認められて株式会社商店街支援センターが設立され、全国各地の商店街へアドバイザー派遣事業や商人塾の開催などまちの活性化を図るために各種事業が企画実施されている。但し、商店街振興組合は商工会議所区域内での設立と制限があり、県下では11都市に商工会議所があり、21組合はその都市に存在する。商工会の区域には設立が認められないことになっている。鹿児島市の場合は脇田電停までが商工会議所区域と設定されている。

4 宇宿商店街振興組合の組織

平成6年京都で開催された鹿児島商工会議所青年部の全国会長研修会で京セラ株式会社の森田専務（稲盛会長同様鹿児島大学出身で、その後社長に就任）が講演され、京セラのアメーバー経営の内容を聴くことが

宇宿商店街振興組合運営組織図



できた。私にとってその内容はその後の組合運営や組織運営の基となった。アメンバー経営とは京セラの創業者である稲盛和夫さんが考案された経営手法で、組織を小集団（アメンバー）に分けて、時間当たり採算＝（売上一経費）÷労働時間で時間当たりの採算の最大化を図る経営方法である。それは宇宿商店街の組織図の原型となり、組織運営に必要な「費用対効果」、「成果追及」、「組織の硬直化防止のための部外者の参画」など、組合活動に柔軟性をもたらし商店街の事業創出や賑わい創造事業など「古きを知り、新しきを創造する。温故創新」を基本とした各プランづくりに活かしている。

宇宿商店街の組織は理事長・副理事長・専務理事・常務理事の役員会が円の中心にありそれを取り囲むような円として理事・監事を入れた理事会が位置する。その円に絡むようにして各事業委員会が一部クロスするようにそれぞれに組み合わせをする。事業委員会の基本は「この指とまれ方式」を採用、事業の趣旨に賛同される方は誰でも参加できる。

また、我々は仕事終わってからの会議でおまけに潤沢な時間もないので、時間を有効に使うと、会議の際に下記の取り決めをして会議をス

タートすることにした。

- ① 会議では「できない」と言わないようにする。
- ② データ収集と分析をベースにして（労力・企画）物（道具・材料）金（資金）・テーマ（事業タイトルと目的）を鮮明にして、方向性を確認、事業を実施する。
- ③ 意見交換をして戦略目標を制定、戦術を考案してアクションプランを作成して実行する。

会議の際に事業を実施するときは過去のデータ解析を下にして進めるが、特に商圈人口の動態把握は事業内容の選定ばかりか個店の商品仕入れや販促活動に影響する要因で、入念に打合せをして目視（自分で見た状態）との比較をすることになっている。

例を挙げると歩いている人は高齢者ばかり目につくが実際住んでいる人は30代が多い。目視観察は思い込みを招き、商品仕入れが偏ると幅広い顧客層を集客できない。但し、お店によってはこだわりをもって商品仕入している店もあるので、それは店の個性として顧客に支持されている。

5 人不足を補うえびすサポーターの存在

宇宿商店街はイベントや事業を手伝ってくれる「えびすサポーター制度」を実施している。年齢・性別・国籍を問わず登録でき、現在83名が登録されている。えびすサポーターへはイベントの手伝いばかりでなく講演会の聴講、事業のマンパワー不足を補うだけでなく一緒に勉強する素晴らしいサポーター役を果たしている。

6 シャッター商店街の出現

商店街はよくイベントをすると言われているが、イベントすることが活性化の目的ではなく、街に賑わいを創出することで個店が工夫して顧客を増やすことが本来の目的である。商店街内に繁盛している個店が多ければ、その商店街の集客機能が高くなり、特にイベントを実施することはないが、全国をみてもそのような商店街は殆どない。また商店街を認知してもらう意味でもイベントを開催する意味がある。

販売価格についても昨今では値引きセールやポイント加算が当たりま



宇宿納涼夏祭り会場

えのようになっているが、基本は定価販売であり、我々商店主は定価販売ができるようサービスに付加価値をつけて顧客に満足してもらえよう知恵を絞りだし、工夫を重ねている。しかし、現実はそうはゆかない。

特に平成6年以降デフレ社会となり、価格競争は勝負ありで量販店との価格競争は無意味なものになっている。資本力のない個店は店の利益を最小限に抑えながら売価をできるだけ安くして戦うが、そのうち体力がなくなり、従業員の解雇、加えて後継者もいないなど理由で閉店につながり、街はシャッター商店街へとなってゆく。

モータリゼーションの進展もこの状態に拍車を掛けている。住民の買物手段が徒歩や自転車から自動車へ変化するにつれて、駐車場のない商店街より大きな駐車場を持つ量販店へ客は流れるようになった。モールは商店街を丸くして通路に屋根を被せた建物で、建物内の駐車場を利用すると雨にも濡れず買物ができ、専門店や遊技場、飲食店やフードコートも設置され、何でも揃うワンストップショッピングができる場所である。しかも、商品価格は安い。

それに対抗するには、商店街の賑わいを創出するイベントや祭りを催

し、顔が見える店がある地域密着型商店街の形成が不可欠であり、地域の方に何回も商店街に来ていただけるよう努力するしかない。

7 商店街を存続させる意味

宇宿商店街を始め多くの商店街は量販店と比較して資本力がない。しかし、商店街が存続することで買物弱者・交通弱者を生まない効果、如いては祭りや伝統文化が残っている地域が存続するのに必要なコミュニティ形成の核になる場所である。

地域の人がお互いに顔と名前を知ることにより会話が始まり、コミュニティが形成され、会話の中から地域資源として貴重な歴史や伝統が引き継がれてゆく。さらに、安心安全な街づくりに繋がり、地域の特色を育むDNAを伝承する人材育成に繋がる。商店街はその資源の醸成の場だけではなく、物の管理、運営および費用の支出を司ってきた。「商店街が疲弊すると伝統行事が出来なくなった」とよく聞く、それだけ、商店街は地域への貢献はもとより地域情報が集まり、住民の安否確認もできる場所であると言える。

最近、商店街は地域のためにも持続可能（サステイナブル）でなければならないと言われている。商店街が存続し続けることは、歩いてくしかない高齢者や子育て中のお母さんのためだけでなく、地域DNAを伝承し地域文化を継承する重要な意味を持ち、地域コミュニティの核として地域活性化の一翼を担っているものと考ええる。

天文館で丸屋を経営されている玉川恵社長さんは「Unitement（ユニイトメント）」を会社の基本方針とされている。私はこれを商店街は地域の人との交流を始め、地元にある川・海・動物や環境・自然・建造物などのすべての資源を、繋げることが地域を存続させるために必要な事と考え、私はUnitementを「すべてを繋ぐ」と解釈し商店街の活動理念として組合の事業に取り組んでいる。

その一つとして「宇宿タウンガイド」を2009年から2013年まで毎年発行した。サイズはA5版でハンドバッグサイズ、携帯電話時代に即したサイズ。

一年目は「宇宿の命を守る」＝医商連携が商店街活動の一つとして重要なことでもあり、宇宿地区にある病院を網羅し診療科目を始めスタッ

まちづくりの原点



宇宿タウンガイド1から5号

フまで紹介していつでもどの診療科目でも受診できる街として紹介した。これは宇宿が安心安全なまちであることを示す効果を生み出している。本には「命を大切に」と動物病院まで掲載している。また、このガイドブックは宇宿健康相談室や高齢者健康体操教室の事業実施に結びついている。二年目は「宇宿の食を守る」と題して宇宿地区のすべての飲食店を掲載し、宇宿の飲食店が美味しくてバリエーションがあり元気であることを紹介した。三年目は「宇宿の人と企業を守る」＝警察・消防・学校・神社・お寺・公認会計士・税理士・保険事務所など我々が安全に暮らすうえで重要な方を紹介した。四年目は「宇宿の歴史を知る」＝NPO かごしま探検の会代表理事の東川隆太郎氏に監修をお願いして発行し、小学校でも教材として活用頂いている。五年目は「宇宿の環境を知る」。宇宿小学校の児童と一緒に脇田川の調査を春と夏に実施。また、紫原・桜ヶ丘の動植物について調べ、その結果を掲載した。このタウンガイドは鹿児島県立図書館にも置いてある。

このタウンガイドは宇宿への転入者や観光客にも好評を博しており、「まちの駅 宇宿」をはじめ、商店街内の主要な店舗に置いてあるので、

是非ご覧いただきたい。

これも持続可能な商店街（サステイナブル商店街）づくりの一つであり宇宿の地域情報を地域内外にアピールする事業である。また、このガイドブックの中に毎年「宇宿ピープル」のコーナーがあり、毎年3名の方を取材して計15名の方を紹介、地域の人材としてその活動を紹介して人を基調する宇宿の考えを伝えている。地域は人に支えられている事である。

ここでサステイナブル（持続可能）という言葉が今後私共の行動指針になるかと思うので、その説明として福岡伸一氏著『動物平衡』他の著書から引用させていただく。

商店街を生命としてとらえると、福岡氏は生命とは「動物平衡」であると定義している。動物平衡とは「それを構成する要素が、絶え間なく消長、交換、変化しているにもかかわらず、全体として一定のバランスが保たれているシステム」である。

生命現象とは「構造」ではなく、流れがもたらす「効果」である。すなわち、商店街を生命と例えると事業の効果が流れをつくるようにすることを意味しており、また、「サステイナブル（持続可能性）とは常に動的な状態であり」、「合成と分解の平衡状態を保つことによってのみ、生命は環境に適用するよう自分自身（商店街）も健全な状態を維持するための調節が必要とされる」とのことである。

置き換えると「商店街：まちづくり」は常に自浄努力で平衡状態を保ちながら元気に動いていることが必要で、そのことで地域住民が元気な商店街であることを認知すると考える。そして、常に動く（生命を維持する）ためには新陳代謝をはかりながら、スピードの調整も含め冷静且つ積極的に活動し、実行することと考える。宇宿商店街では、青年部を中心に「街の清掃」や組合全体で実施する違反広告物除去、灰取りなど環境美化運動、高齢者健康相談、高齢者健康体操教室、歩道のバリアフリー化、小学生大声レスキューコンテストの開催、子供の見守りや防犯カメラの設置による犯罪防止などの安心安全なまちづくり事業、灯りのページェントの開催やえびす物産展の開催、毎月開催する「おじゃったもんせ市」などの販促事業、2014年33回を迎えた「宇宿納涼夏まつり」など地域密着型イベントを年間20以上実施してサステイナブル商店街に



毎月開催する「おじゃったもんせり」

なるために努力を続けている。

8 商店街の連携から生まれた商店街グルメグランプリ

前述した「シャッター商店街」、日本の各都市には今このウイルスが伝染している。

特に平成12年に大店立地法が制定されて、施行された平成19年から1万平米以下の量販店は（2・3の用途地区を除いて）どこでも出店可能となり、爾来急速に増えている。県内の商店街でも昔の元気はない。しかも人口減少時代になり、地方から人がいなくなるなど過去の栄華を取り戻すことは難しい。しかしながら何とか地域が元気になる方法は無いものかいろいろ考えた末、思いついたのが「食の活用」、商店街には飲食店や食堂、レストランが店を構え、人の食欲をみたくべく営業を続けている。地域には昔からの伝統食があり、地産地消が推進されている中、かれらの力を借りて新しいグルメが開発可能と考えた。すなわち「食と商のコラボレーション」を創ると地域活性化ができるのではと…。商店主が力を合わせれば待ってましたとばかり行政や商工会議所・商工

会が支援を始めるのではと…。その動きが始まると地域住民も商店街を見直し、商店街に足を向けるようになるのではと…。早速行動を開始した。

最初からグルメを出しませんか、と言っても相手にされないと思い、第一段階として鹿児島県内の商店街で頑張っている人のネットワークを創ることにした。そのネットワークづくりに役に立ったのは40歳代の前半に所属した鹿児島県商工会議所青年部連合会（鹿児島県には商工会議所が11か所あり、すべてに青年部が設置され連合会を組織、会員数は約1000人）での会長経験。当時は県下を廻りながら会議や研修会などで沢山のひとと出会えた。彼らからの情報をもとに地域リーダーをノミネート、各地の商店街が抱える課題を知るために、当時鹿児島大学教授の原口泉先生を始めとする講師の皆さんと現地訪問して意見交換する中で20名の地域リーダーを選出。賛同を得て「商店街まちづくりネットワーク」を組織した。さらに県下各地の商店街の課題整理をするためネットワークメンバーと地域組織の代表や高校生・大学生・女性に参加してもらいワールドカフェを7ヶ所で開催、地域と一緒に課題解決に向けた事業啓発や空き店舗を活用した具体策などをまとめた。

そして、いよいよそれらの地域リーダーに商店街グルメによる街づくりで商店街活性化を目指そうと呼び掛けたところ、9つの商店街が手を上げ第一回が始まった。その名も「S-1グルメグランプリ」、Sは商店街の頭文字をとって命名。この名称はさらに進化し第三回から「Show（商・笑・観せる）-1グルメグランプリ」となった。参加商店街も二年目が11商店街、三年目と四年目は一部入れ替えも含め13商店街に増えた。来場者も年々多くなり平成13年度（平成14年2月）は3万人の来場者を集めた。食数も2万食を超えて大いに盛り上がり、この評判を聞きつけ中央の雑誌やTV局から取材申し込みも殺到。2年目・3年目を連覇した枕崎市通り会連合会は毎年5月の連休に開催している「かつお祭り」の人数が4万人から7万人へ急増、しかも県外からの客が増え報道の力を実感、そのためグランプリグルメ「枕崎鰹船人飯SP」を出している10店舗は夜まで行列ができていたと聞いている。

平成15年2月は11商店街が参加して霧島市で開催する。鹿児島市を離れて集客ができるか商店街グルメの波及力を試すことにした。

まちづくりの原点

この大会の成果は、まず商店街のリーダー間の交流と連携が始まり、リーダー同志の信頼関係が築かれた。特に Show-1 グルメグランプリ 地方大会の開催は、お互いの街を訪れることで成果が上がっている。その地方大会のシステムは参加商店街の地元のお祭りに Show-1 ブースを設置し、他の 3～4 商店街が参加。参加商店街は地元の大会以外に他の地方大会に一定数の参加が義務づけられており、グランプリは地方大会・本大会の合計得票率の平均で争われる。中には奄美・種子島の離島商店街も参加するため、今まで行く機会のなかった島の商店街を知る大変良い機会となる。

さらに参加したメンバーはその地の商店街リーダーの動きや企画力などを観察でき、交流会を通して意見交換がなされ自分の活動を再考する良い機会になっている。

参加商店街のリーダーは殆どが祭りやイベントの主力として運営に携わっており、貴重な意見交換の場となっている。話題は企画や資金集め、人や組織の運営方法、自治体との連携など幅広く、さらにはリーダーが抱える個人的な悩みも相談できるなど、商店街や個店の将来を描くプランを作る有効な機会となっている。

加えて、この Show-1 グランプリは商店街交流ばかりか自治体同士の交流にまで発展している（志布志一西之表交流、枕崎：鯉は昆布：稚内と昆鯉プロジェクトを立ち上げた）。

また、各祭りで差し入れや手伝いを刈ってでる地元出身者もあり、鹿児島県全体の元気づくりの一助となっている。今後もこの事業を通してさらに各商店街の活性化を図り「食と商のコラボレーション」を根付か



Show-1 グランプリ会場



グランプリに輝いた枕崎商店街

せて客の商店街回帰を図ってゆきたい。

9 鹿児島で初めてのまちの駅の設置

宇宿商店街は平成13年10月全国で44番目、鹿児島県初の「まちの駅宇宿」を設置した。

前述したように商店街に課せられた役割の一つとして地域コミュニティの再生がある。地域コミュニケーションの欠落により社会的問題が数多く発生し、安心安全で高齢者や子育て家庭にやさしい街が消えていった。「隣は何する人ぞ!」というように無関心な地域が増え、危険な環境になっている。それは地域の商店街が疲弊すればするほど増えている。

国は昔のように気軽に声掛けでき、会話がはずむ街になるとその地域は犯罪も少なくなり、住みやすい街になると考え、昔情報が一番集まり地域コミュニティの核である商店街にその再生役を付託するようになった。しかし、善悪関係なく、年齢性別関係なく情報が予想を超えるスピードで入る時代になると一概にコミュニティ再生が安心安全な社会づくりに効果があるとは言えないが、少なくとも顔を知り、会話がができる地域は比較的安心安全な街といえる。

そこで、宇宿商店街は「溜まり場」機能を持ち人と人との交流の場となる「まちの駅」の設置に取り組むことにした。

「まちの駅」は次の4つの機能を持つことが条件とされる。

- ① 休憩機能：誰でもトイレが利用できて、無料で休憩できる。
- ② 案内機能：まちの案内人（スタッフ）が地域の情報について丁寧に教えられる。
- ③ 交流機能：地域の人と訪れた人との出会いと交流のサポートができる。
- ④ 連携機能：参加されるみんなが相互にネットワークを活用して、一緒に“おもてなし”の地域づくりを目指す

宇宿商店街の戦略目標である「鹿児島で住みたい街 No1を目指す!」を達成するためには地域コミュニティが不可欠である。それを醸成するこの4つの機能は「地域の人の心構え」「商店街の受け入れ態勢」「来街者の定住促進」を促すもので考える。成果は徐々に上がり、平成26年、

まちづくりの原点



まちの駅健康体操教室

開設13年目を迎え来場者も20万人を超えている。

毎日、一般客に加え40人前後の高齢者の方々が日替わりで来場、閉店まで会話が弾んでいる。それを見るにつれ「まちの駅」はコミュニティスペースとして街づくりに欠かせない場になったと思う。また、利用される高齢者の皆さんは情報通で新しい街のインフラの良し悪し、新しい店や店員の評価、イベント情報など宇宿商店街のために意見を言う貴重な情報源である。さらに「まちの駅」は高齢者の安否確認の場となっている。3人の案内人が「まちの駅」に勤務しているが、高齢者見守りの役割を果たす地域貢献人と言える。

今後は県内外の物産販売や昼食提供だけでなく観光案内所としての機能の充実、地元情報の習得、高齢者対象の健康体操教室の充実など宇宿コミュニケーションスペースとしてさらに多くの方に利用してもらう努力を続ける。また、子供110番の店としても登録しているので、お子様やお孫さん連れて案内人の顔を覚えるためにも是非一度お出で頂きたい。

10 人口減少の中での商店街の方向性—中山間地の活性化事例を参考にし—

2006年から日本の人口減少が始まった。日本創生会議がまとめた資料によると2040年までに対象調査市区町村1800自治体のうち人口1万人未満となって将来消滅する市区町村は523に上ると発表されている。その中で我々も将来の「商店街活動方向」を示すことが課題となる。

男女5才別階級人口グラフは一番お金を使う生産人口の減少を示している。ストレートに表現すると消費金額が減る。今、日本経済の三分の一は65歳以上の消費力で占めている。この65歳以上の消費力もしばらくは期待できるが、高齢者数も間も無く減少を始めることを考えると次の段階を推測し対策を講じる必要がある。量販店も淘汰の時代になると思うが、小売店舗はさらに厳しく淘汰されると考える。

しかし、高齢の交通弱者が増えることを考えると御用聞きも含め、こまめなサービスを展開するお店は生き残れると考える。特に中心商店街より近隣型商店街にチャンスが回ってくるように考えるが、なかんずく絶対数が減る若年労働力の確保が問題となる。商店街でも将来展望について研究を始めており、医療施設や行政施設を商店街周辺に配置するコンパクトシティ構想の実現にむけ取り組みが開始されている。

国内では中山間地の人口減少で限界集落が増えるが、中山間地の集落が崩壊すると海を守る山の破壊につながり、日本にとって大事なタンパク源が確保できなくなる。島根県では集落公民館単位で地域を分けし、地区内小学校の児童数を減らさないようIターンを広く全国に募集して子育て家族の招致を実施し、成果を上げている。Iターン者には集落内や近隣の事業所で仕事ができるようにセット、古民家を改修して安い家賃で住ませている。村にとっては若い労働力の確保と児童数が変わらないので学校機能が消失しない両得となっている。Iターン者は都会に住んでいる時と比較して給料は安くなるが、集落上げてのサポートと、託児は村が担当、集落の農家から食材のプレゼントなどもあり、生活費は都会の三分の一で済んでいる。但し、この環境は村民上げて趣旨を理解して互助の生活環境を創り、まさしく地域コミュニティが機能することが必要となる。

また、徳島県神山町では村のいたるところでWi-Fiが使えるIT環境

まちづくりの原点

を整備するとともに古民家を再生して事業所が研修所として利用できる
と都会の企業にアピールすると、誘致に成功して、中には社員が現地の
方と結婚して住民となっている。

宇宿商店街も平成12年に比して平成26年の商圏人口は1000人以上増加
しているが「鹿児島で住みたい街 No1を目指して」の戦略目標に基づき
再度事業を検証して環境整備やソフト事業等を将来のために見直す必要
がある。

11 まちづくりの楽しみ方

NPO かごしま探検の会の代表理事東川隆太郎さんは何気なく街にあ
る木や川、古家の壁など、街を代表する遺産として賞賛し、まち歩きを
楽しむ方法を実に上手に参加者に提案する。

「世界遺産」ならぬ「世間遺産（せけんいさん）」の命名、「温泉」は「僕
泉（ぼくせん）」、「道」は「僕道（ぼくどう）」など枚挙に暇がない。実
に面白い。これは見方を変えると「まちづくり」に大いに役立つもので
まさに前述した「まちの駅」の案内人には来訪者や転入者への説明材料
として教材になる。さらに、宇宿を楽しんでもらうためにはオリジナル
のグルメを提供し、イベントを考える必要がある。Show-1グルメの「鶏
の宇宿たっこん飯」も毎月第一・第三水曜日に提供している。

これらを含んだ宇宿のまちづくりの楽しみ方を私なりにまとめると次
ようになる。

- ① 宇宿の珍しい家を探してみる
- ② 宇宿の楽しい人を訪ねてみる
- ③ 宇宿の歴史を学ぶ
- ④ 宇宿のタウンインフラを検証する
(駅・電停・学校・自然・橋・浜・堀・水路・川・海・丘・坂など)
- ⑤ 宇宿の唄を作る

時間があったら宇宿を散策して観察してみるときっと面白いものが見
つかるはずである。

12 街づくりの原点は人づくり

商店街活動の原点はイノベーションである。人を変え、地域を変える。

それが街を元気にする。

元気な街には元気な店舗がありそして元気な経営者がいる。経営者は街を愛し、人を愛する。それを保ち続けることでサステナブルな商店街が形成され则认为る。

私は、活動するときの精神的な柱として下記の言葉を思い出すことで自分が「克己」する。

「知恵のない者は汗をかけ」、「一滴の汗」を大事にする（枕崎商店街）

「なせば成る 為さねば成らぬ 何事も 成らぬは人の為さぬなりけり」（上杉鷹山）

「してみせて、行ってみて、させてみる」（上杉鷹山・山本五十六）

「有言実行」「和をもって尊しとなす」（聖徳太子）「和して同ぜず」「克己」（王陽明）

「敬天愛人」（西郷隆盛）「出会う人みな師なり」（吉川英治）

いつまで活動を続けられるか分からないが、「頑張らないけど、あきらめない、楽しむ」精神で何事にも取り組んでいる。

（宇宿商店街振興組合理事長）